

平成26年7月9日(水)

老球の細道33

西郷隆盛に学ぶ「自分の限界を作らない」

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

日本の歴史の一番面白いところと言えば、なんといっても戦国時代と幕末明治維新の時だろう。このどちらにも脇役として会津が登場する。そのことを知ってから、会津に生まれ、育ったことを誇りに思えるようになった。そして歴史が好きになった。

幕末、維新の人物で大好きなのは坂本龍馬である。司馬遼太郎の『龍馬がゆく』を読んだから、ずっと私の憧れの人物だった。しかし、10年前、坂下高校の図書館で同じ司馬遼太郎の『翔ぶが如く』を見つけた時、これまた運命の出会いを感じた。すぐに借りて本格的に読んでみた。単行本で7冊。西郷隆盛の生き様を記した長編大スペクトルの読み物だった。読後の感想に「幕末当時の20,30代の男達の心意気、志の高さに圧倒された。義のために自分の命を捨てることなどなんとも思わない潔さ、行動力と美意識に圧倒された。50歳になってしまった自分が恥ずかしい」と私の読書ノートに書き記してあった。それからすぐに坂本龍馬から西郷隆盛に浮気をしてしまった。愚直で、自分に厳しく、無欲で、常に大きな理想に向かって生きていく姿勢に感銘を受けた。

西郷隆盛(1827~77)は幕末、明治維新に活躍した薩摩藩(鹿児島県)の政治家である。1858年安政の大獄と藩主(島津斉彬)の病没に絶望して僧月照と投身自殺を図ったが西郷のみ蘇生。その後、大久保利通らと薩摩藩の中心人物として活躍し、王政復古のクーデターを成功させ、戊辰戦争では官軍の参謀として全軍を指揮した。その後、政府の重職に就いたが、征韓論で大久保利通と対立し下野、薩摩に帰った。1877年西南戦争を起こして敗れ、自刃するというまさにドラマチックな一生を終えた傑物である。

西郷隆盛曰く。

「道は天地自然のものにして、人はこれを行うものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛したもう故、我を愛する心をもって人を愛するなり。人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を尽くし人をとがめず、わが誠の足らざるを尋(たず)ぬべし」

「命もいらす名もいらす官位も金もいらぬ人は始末に困る。しかし、この始末に困る人ならでは艱難を共にして、国家の大業を成し得られぬ」

西郷は「敬天愛人」を信条として部下からの人望は絶大だったという。部下達に倫理道徳や偉人の業績を良く話して聞かせたという。この話を聞いて、「自分には無理だ」という人間に西郷は一括したという。それは戦いに臨んで逃げるよりなお卑怯だと。

孔子の論語にも同様な話があるらしい。孔子は「先生の道徳を喜ばないわけではありませんが私には無理です」といった男に「いま、なんじは画れり」。いま、おまえは自分を見限ったと言いつつ放った。

人間は「自分には無理」と思った瞬間に自分で自分を檻に閉じこめてしまう。西郷は一見強く見えるが、始終、自殺を考える弱さもあつたそう。しかし、自分で自分の限界を作らない男であつたので、繊細な心を持ってしても、気持ち萎えずに幕末、維新の大仕事をやりきることができたようだ。人は自分の思ったような人間にしかなれない。